

第3回 リニアやまなしビジョン（仮称）検討会議 議事録

日時：令和元年12月20日（金）10:00～12:00

場所：都道府県会館401会議室

- ◆議題：ビジョンで目指す姿と実現に向けた取り組みについて
災害に強いリニアを活かした防災力の強化について
新たなゲートウェイに必要となる機能について

◆出席者：【議長】

山梨県知事

【検討会議委員】 ※敬称略

| | |
|--------|----------------------------|
| 東 博暢 | （株）日本総合研究所 主席研究員 |
| 岩倉 成志 | 芝浦工業大学 教授 |
| 加藤 晋 | 国立研究開発法人産業技術総合研究所 首席研究員 |
| 佐々木 邦明 | 早稲田大学 教授 |
| 鈴木 克宗 | （一財）道路新産業開発機構 業務執行理事 |
| 武田 文男 | 政策研究大学院大学 防災・危機管理コースディレクター |
| 田中 道昭 | 立教大学ビジネススクール 教授 |
| 額田 春華 | 日本女子大学 准教授 |
| 廣川 克也 | （一財）SFCフォーラム 事務局長 |
| 美原 融 | 東洋大学大学院 客員教授 |
| 廻 洋子 | 敬愛大学 特任教授 |
| 山本 和志 | 元国土交通省 技官 |

【事務局】

リニア交通局長、リニア推進監、リニア交通局次長、リニア推進課長、リニア企画監
知事政策補佐官、防災局次長、産業労働部次長、県土整備部理事、県土整備部技監

◆会議次第：

- 1 開会
- 2 知事挨拶
- 3 議事
 - （1）ビジョンで目指す姿と実現に向けた取り組みについて
 - （2）災害に強いリニアを活かした防災力の強化について
 - （3）新たなゲートウェイに必要となる機能について
- 4 閉会

◆内 容 :

1 開会

三井リニア交通局長

- ・早朝からお集まり頂き、誠にありがとうございます。
- ・ただいまから、第3回リニアやまなしビジョン検討会議を開催する。

2 知事挨拶

長崎知事

- ・第3回リニアやまなしビジョン検討会議にご出席いただき誠にありがとうございます。これまでの検討においては、第2回の検討内容を受けて、実務担当者によるWGでは、開業による劇的な時間短縮効果を活かし、山梨のポテンシャルなどを踏まえ、リニアがある山梨において取り組むべきテーマについて、ご議論をいただけてきたところ。
- ・今回の検討会議においては、これまでのWGでの検討結果を踏まえて、ビジョンで目指す姿と実現に向けた取り組み、災害に強いリニアの特性を活かした防災力の強化、新たなゲートウェイに必要となる機能について意見を賜りたい。
- ・リニアの駅位置については、先般、大津町地内と小井川駅の間を、リニアの高架下を専用道路として使い、そこをシャトルバスで結ぶことで、身延線までを約4分～約7分で連結、定時性を確保することとし、駅は大津町地内に決めさせていただいた。
- ・詳細は後ほど説明するが、今回はこれを基に活発なご議論をお願いしたい。

3 議事

(1) ビジョンで目指す姿と実現に向けた取り組みについて

[資料1について事務局より説明]

委員 [これまでのワーキンググループでの検討状況について報告・総括意見]

方向性の内容について、事務局から報告があったとおりであるが、WGの中において、いくつか考え方を共有しながら議論してきたので、補足として数点説明したい。

1つ目に、やはりビジョンである以上、夢がなくてはならない。ただその夢というのは、現実から乖離しては仕方ないということが考え方のベースにあった。2027年はそんなに遠い将来ではない。ビジョンというのは、今から2027年、さらにその先まで見据えないと、ビジョンにはならないということになる。

リニア新駅は現実であるわけだが、県庁所在地でもある都市に新たなゲートウェイを作ることというのは、実は県民にとって千載一遇のチャンスとして捉えることができるのではないかと、より豊かな未来のある社会にする好機でもあるので、やはり夢がないと面白くないという結論となった。

2つ目に、夢と言っても現実への取っ掛かりがないと面白くない。具体的なシーズ、種になるものが山梨県に存在して、可能性を広げるような考え方でないと面白くない。今あって、将来の発展に繋がるポテンシャルが重要だということになる。そのような意味で、種を繋げるような仕組みがビジョンには必要という認識だ。

3つ目は、山梨らしさを示すブランディングが必要だ。他の県と同じでは意味がなく、面白くないし、差別化も図れない。今の山梨に繋がるシーズがどこかにあって、実現への取っ掛かりがあることが必要である。山梨のブランド価値をどうやって高めていくのか、それがビジョンに盛り込まれていなければ意味がない。

4つ目に、チャレンジすべきだということだ。山梨に種しかない、と言っているうちは夢にもならない。行政と民間が連携しながら、チャレンジすることが大事だ。チャレンジのないところに、イノベーションは存在しない。今までの行政のあり方から一歩離れて、新しいコンセプトでチャレンジしてみてもどうか。山梨の弱みも強みに変えられるかもしれない。山梨は盆地であり、それほど広大な平地があるわけではないが、これを地勢学的な長所だとする発想の転換によってチャレンジしてみるという発想が必要ではないか。たとえ小さな芽でも、大きく育てることができるかもしれない。新しい考えやアプローチに、積極的に官民揃ってチャレンジしていくことが、今回の方向性の基本的な考え方とアプローチとなっている。

それほど単純ではないということも議論した。おそらく、県内にあるあらゆるリソースを動員しなければ難しく、知事によるリーダーシップ、行政によるサポートも色々な意味で必要となってくる。そもそも、PR、イベント、コンテストをやり、世間の注目を浴びながら、世の中の人たちが注目することによって、ビジョンがより現実に近くなっていくのではないか。

もちろん、資料1に不足しているところがあるかもしれない、おかしいところ、不十分なところは、委員の様々な意見を聞いたうえで、最終的にWGで調整したい。

議長（知事）

早速、委員の方から意見を賜りたい。バックアップ拠点の可能性と新たなゲートウェイに必要な機能については、後ほど、資料の説明後にまとめて議論したい。まずは、WGの議論を踏まえたビジョンが目指す姿、実現に向けた施策展開の方向性が適当なのか、開業後を見据えて特に力を入れる分野、足りない視点などについてご意見をいただきたい。

委員

説明頂いた資料1のp3で、右端の、「県民が豊かさを実感」は究極のゴールであり、目指すべきところなのだろうと思う。ただ、「雇用の拡大」、「所得の向上」は必要なことではあると思うが、昭和の時代のスローガンのようだ。2027年、2040年の令和の時代に、今の10～20代が家庭を持つ、社会の中核を担う世代となったときに、果たして、今の子の感覚で、雇用の拡大、所得の向上を望み、それが実現したときに幸せを感じるのか。今の若者を見てみると、40代、50代の感覚とはずいぶん違う印象があり、そこは少し考慮した方がよい。

テストベッドの聖地化については、今から駅や道路ができるまでの期間というのも、まさにテストベッドを取り組むことにふさわしい。出来てしまったら、ほじくり返したりもできないので、この期間を活かして誘致し、今からクリエイティブに関わってもらえることのできるのではないか。

また、テストベッドをやる時には、投資ファンドのようなものが必要になるのではないかと。ただ、100億円も必要なのではなく、恐らく15～20億円あれば十分だ。正味投資できる枠は、8割くらいになると思うが、一部をスタートアップ向けとして、数百万～2、3千万規模の投資をする。他には、中小企業や大企業が、県内で新たな事業を展開する、事業会社を作るときに投資をすると。そういったファンドは、将来のリターンも期待できるし、呼び水にもなるので、関連産業の集積や次世代を担う人材育成にも大きく資すると思う。

活動を支える社会基盤のところでは、5Gの環境整備とあるが、政府では、既にポスト5Gに向けた基金を作り、研究活動をスタートさせるという動きもある。長い目線で考えたときには、ポスト5Gや、自動運転やロボットも、ポスト自動運転、ポストロボットといった目線で見ていくと一層魅力が増してくるのではないかと。

議長（知事）

県の現状の取り組みについて説明をお願いしたい。

リニア推進課長

クリーンエネルギー分野の「本県の動き」というところで、米倉山の太陽光発電の中でHySUTが次世代型水素ステーションの実証実験を米倉山にある県有地に拡充整備して試験を開始する予定である。5Gも、県で本部をつくって取り組んでいる。

議長（知事）

今度、FC-Cubicと提携するが、ゆくゆくは燃料電池の評価機能をここへ全部持って来たいということで相談している。それによって、技術開発はここで全部評価できることになるので、燃料電池関係は山梨でやってみようという形に結びつく。

また、ファンドに関しても、いくつか組成できないかということで検証している。

5Gは、ローカル5Gを大手と組んでやろうとなっている。ローカル5Gとローカル5Gを県が所有する専用の光ファイバーで連結した場合どうなるかの実証も始めようということで、国と相談している。それらを踏まえ、ポスト5Gについても勉強していきたい。

委員

現行の県民ニーズとして、少子高齢化に伴う農業の担い手の不足関係について考えると、県内の至るところに空き家同様に休耕地もかなり出てきている。一方、山梨県民の健康寿命の全国トップクラスの維持について複数の要因のうち、農作業の適度な運動や野菜の摂取などが挙げられている。これは、2018年の山梨総研のレポートでも示されている。

リニア開業に伴って、移住者や二地域居住者へのニーズ、既に存在している県民の中でも、定年などの機会に農業への就業機会を得るといった、それぞれのニーズに対応した取り組みも大事な視点と考える。

例えば、農業の6次産業化のように、現在の生産から加工までの生産活動を、さらに消費に至るまでのローカルフードシステム、消費者との交流による直売場やレストラン+（プラス）交流施設等の実現に対応した支援体制づくりの確保ができないか。これらを新駅の近郊

でも実証できないか。

その先には農作業の効率化のみならず、余暇活動にあたる収穫体験や農業民宿と連携したグリーンツーリズム、農村レストラン等による生産品のブランド化による、地域複合アグリビジネスがあるのではないか。

これらの既に存在する県民意識や、外部からのニーズに対応して、もとより山梨県が力を入れてきた農業分野にも視点を当てたら如何か。

委員

先日、リニアの開発拠点を見学したのだが、平日にもかかわらず結構な人が来ていた。休日になると子供たちもいっぱい来る。サイエンスのテストベッドの聖地として、リニアが原点として既にあって、これをブランド化していく時に、活かしていればとても良いと考えた。

テストベッドと関連する産業と、観光をうまく結びつける産業観光が大事だと考える。墨田区の「スミファ」で、多様な業種の中小企業をオープンに出して、外から人を呼び込むのだが、その中心である浜野製作所が、色々な実証的な面白いものづくりの実験の場を社内で提供しており、見学もできるようになっている。この会社は、自動運転で様々な場所をつなぐという開発をしており、東京モーターショーにも出ている。ドイツの企業がコーディネーターで中核に入り、東京や関西の企業を繋ぎながら車を開発している。その大きな目的としては、地方における中山間地域の高齢化による買い物難民などの課題に対して、このような人を繋ぐものに育てていきたいとしているが、いきなりお金を生むことはできないので、まずは遊園地などを活用して実証していくようである。

また、その会社の方は、「山梨のワイン工房を楽しみながら自動運転車で巡るという実証ができるの良いな」とも語っていて、そのようなアイデアはあるが、都市では場所がなくて実証できないので、是非山梨で取り組んで欲しいと興味を示していたので、紹介した。

委員

知事の発言に、ローカル 5G で県の光ファイバーを使うとあったが、このような紙で、5G をやるといってもあまり説得性はないのだが、今のキーワードで作ると皆関心を持つ。

ローカル 5G は主に工場向けのパッケージで世の中に出そうとしている。キャリアのネットワークとローカル 5G を繋ぐ時のファイバーを誰がどのように引いて、費用負担するかが全く決まっていない。総務省でも、非常に高いコストを下げないといけないという議論になっているので、県の光ファイバーを使うことは、とてもインパクトがある。

民間側からすると、現状、甲府に行くよりも名古屋に行った方がストレスもないということだが、リニアで一変することになる。東京に本社がある企業で、テストベッドを作るとしたら、甲府には地の利があるので、5G で今の話をすると飛びつくのではないか。テストベッドの誘致では、通り一遍の話ではなく、具体的に何をしてあげるとか、パッケージで言うことが大事だ。

今のローカル 5G は、主に専用端末でしか動かないので工場向けである。間接的だが、総務省に一般ユーザーにもスポット的に民間の端末で使えるようにしなくては意味がないと

は言っているが、今は専用端末だけである。

また、WiFi 経由でも使えるのだが、エリアも限られる。例えば、専用端末だけだと、大きいイベント会場や TDL で、災害時にはローカル 5G を個別の端末でやっても全く使えない。

渋谷のまちづくりで最初のスケルトンを描いた時は、街区のイメージを描いて出すのだが、Google が本当に来てくれるか分からなかった。まずは、コアになるところに話をしに行くと、相手方が求めているものが分かって、こういうものを用意したら良いということが分かるので、コアになるところにセールスに行き、逆に必要なものを聞き出していくといったようなコミュニケーション型で進めたらどうか。

二子玉川に楽天が立地する話も最初のプランニングではなかった。一定のものを作って、コミュニケーションしていくとコアとなる企業が立地し、それに合わせて街区整備ができる。

中津川でも同じような議論があり、大きく土地区画整理でやろうとしたのだが、どういふ人が来るか分からないので、来る人とコミュニケーションを取りながら必要な街区をつくっていくという、成長型の区画整理とした。来るコアの人を一本釣り、来るようなことを考える。県の方が個別に今のようなことを言って行脚することが大事ではないか。

委員

全体の流れとしては良く出来ている。このようなことをやる時は、着眼大局・着手小局がポイントであり、トータルな全体の絵姿について同じことを描きながらも、一つ具体的な誘致をして、どういうものを求めているかを手探りでやりながら、一つの成功を以って、他を引き付けていく。着手は小局で、あまりあちこちに手を広げず、一つの成功事例を作ることが大事ではないか。

「優先して取り組む施策」とあるが、ここが具体的に何になるかということで、相乗効果が期待される施策が決ってくる。それがインターナショナルスクールかもしれないし、小学校をつくるということかもしれない。まずは、やっていきながら一本釣りをして、話し合いながら広げていった方が具体的なのではないか。

ただし、着眼は大局でなければならず、全体のバックグラウンドは皆で共有しなくてはならない。着手は小局でやっていかなければ議論しただけで終わってしまう。一つの成功例があれば、ずっと付いて来る。

委員

何のためのテストベッドの聖地というそもそもの議論があるが、色々聞いていてストーリー立てしてはいかがか。世界的に見ても、都市開発にパラダイムシフトが起こっている。特に、日本の地方で先端的なまちづくりというと、世界的にもインパクトがある。風景とか、昔のものを残しながら、最先端を実装すると、見た目は地方なのだが、やっていることは新しいというコンセプトが融合しているところは中々ない。

最近、アルファベット傘下のサイドウォーク、中国のアリババ、テンセントもそうで、テンセントが島を丸ごと買ってまちづくりをすることを発表したが、結構緑などの自然の要素を盛り込んでいる。排水、水の循環システムも、自然のシステムをうまく活用している。木々の蒸散効果を使って災害対策をしようという考えで、かなり自然要素を取り込んできている。

もともと都市に緑を植え込み、自然を活用した、新しいスマートシティも考えられる。世界のトレンドはどうなっているかというと、サーキュラー・エコノミー（循環型経済）となっている。

テストベッドを何からやるかの話だが、環境、燃料電池、水素というような、日照時間も長いことから、どうやってサーキュラーな都市を作るという命題に対して、そのためのテストベッドを活用するというストーリーが1つある。例えば、ここで面白いと思ったのは、既にエネルギー関連の施設が出来ていて、防災などにも繋がり、モビリティとエネルギー政策がセットになるということ。

平成と令和のまちづくりで決定的に違うのが都市計画のやり方。国交省ではスマートプランニングという話をしている。これまでの都市計画では、都市工学的にゾーニングをしてきたが、今後の令和の時代ではそれはない。当然ながら、街は変容していき、人は減る。また、50年固定して人が住むという概念もない。徐々にアジャイル（柔軟、俊敏に）で街をつくっていく。一つプロジェクトを立てて、街が徐々に変容していくというモデルを全体最適でデザインするか。そういう意味では、27年の開業までにやれるところも結構ある。徐々に準備していったら、27年に駅ができ、その一部を移植する。そこからある程度時間が経って、企業や産業が出てきたら、さらに新しいサービスを広げるという形で、あまり作り込みすぎないことが非常に大事だ。

そういう意味では、何か1つ柱を立てて、最終的にはサーキュラー・エコノミーを目指し、強いところを伸ばせば良い。健康寿命が日本一であれば、世界一を目指すことを旗に掲げ、それを支える周辺のテクノロジーやサービスは何があるかを考える。それに関係する企業の人やアントレプレナー（起業家）の人たちを呼んでくる。企業誘致するときも、人を呼ぶときも、投資ファンドを呼ぶときも、そこにコンテキスト（文脈）がないと来ないので、ストーリーがすごく大事であり、それが持続してくると、結果聖地になるという話である。

最近、都市全体がインキュベーター的（起業支援的）に機能するという話をしていて、インキュベーション施設を色々な都市が作っているが、それぞれ個別の施設になっていて、街全体がインキュベーターになるというコンセプトでやっているのは、今は福岡だけ。

もう一つは、イノベーション・エコシステムを作りながら、スマートシティ推進だという話を政府の委員会でもお話している。スマートシティというのは、基本的に、課題があつてそれを技術で解決しながら実装するというサイクルである。そうすると、時代とともにどんどん新しい壁が出てくるので、スマートシティで推進しながら解決すると、エコシステムが出来てくるというストーリーである。すると、そこにスタートアップが集まってきて、そのためにはファンドが要となる。

2027年を考えたら、今から高校生にアントレプレナー（起業家）教育やリベラルアーツ教育をしないと、7年経って社会人になったときに、どういう仕事をしているかにつながる。タイムラインを見たときに、6年前からやるべきことなどある。そこでは、人も成長し、街も成長し、技術もテクノロジーコストも変わってくる。5Gは当たり前となる。この7年の変化は激しいはずだが、この時点では設計できないので、軸を立てて徐々に広げながらアジャイルにやっていくことが、テストベッドのシナリオ、ストーリーとなる。

そのための政策として、ファンドを組成する自治体もあれば、実証実験のサポート、ギャ

ップファンドを用意する自治体もある。どういう政策メニューになるのかは、テストベッド関連政策で出てくるはずであり、それをどうやって一体化するかとなる。

既にあるエネルギーのプロジェクトに関して、そこから派生して色々なプロジェクトが産まれてき、政策の体系を作る。施策の作り方もこれからアジャイルになる。毎年政策を見直しながら都市に実装するモデルを考えるのが良い。

委員

ビジョンを明確にすることと、総花的でなく一点集中とするという知事の考えがあると思うが、それに一番相応しいのは何かと考えていた。一番重要なのは、戦略のフレームワークをシンプルにすること。山梨の強みは何で、競合の他県はどういうことをやっていて、どういう強みがあって、BtoBの、企業が求めるニーズは何かを3つ重ねたときに何が望ましいのか。

恐らく、一言で言語化するとクリーンエネルギーのエコシステムを山梨で作るというようなことだと思う。p4に想定されるターゲットとしてモビリティなどが書かれているが、実証実験の場をどこにするか、企業側の視点で考えたとき、なかなか山梨でやる必然性は乏しい。

米国が良い例かもしれないが、ラスベガスがあるネバダ州というのは、積極的に他の州が取らないリスクの高い実証実験を導入している。実証実験をする立場から言うと、その場でスケールできるかどうか。本音は、都市部で実証実験したい。山梨の人口は多くなく、人口密度も高くないので、企業側から考えたときに蓋然性が乏しい。

そういう中で、燃料電池を中核するクリーンエネルギーに関しては、いうまでもなく、世の中はEV化に流れている。トヨタが担っている水素化は厳しいが、それだけに遅ればせながらも推進したいと考えている。それは日野自動車も同じだ。その中に、太陽光などの色々なクリーンエネルギーを入れていくことが中核となるのではないか。

グローバルな優位性はともかく、取っ掛かりとしては山梨大学が有名であり、トヨタ自動車が力を入れたいと思っている燃料電池を中核に、それだけではテーマ性に乏しいため、少し広げてクリーンエネルギーのエコシステムを構築するというようなビジョンを中核とし、そこからのかけ算でモビリティという話も出てくる。

一点集中で山梨らしさ、企業側から見た、山梨でやりたいというところは何か。ロボットやIoTはどこでもできてしまうので、全く特徴がない。燃料電池を中核とするクリーンエネルギー・エコシステム構築の実証実験の場にしていくとすれば、トヨタ、日野自動車などが具体的にイメージでき、可能性があるのではないか。

委員

資料を見たときにすごく新しいモノがたくさん入っていて、ほとんどが外から人を呼び込んで始めていくものに見える。山梨県に今いる人で、色々な新しいことを始めている人たち、ワイン、テキスタイル、遺伝子工学などこれから伸ばしていきたい色々な技術がこういうところに反映されていった方が良いのではないか。

中にいる人たちも、このビジョンと一緒に向かってやっていける形が良いのではないか。一点集中という議論もあり、本当は集中的にやった方がよいのかもしれないが、今いる県民

と新しい人たちがうまく融合するような計画を立てていくべきだ。

p3の「雇用の拡大」と「所得の向上」を打ち出すのはすごく大事だ。山形県の総合計画の委員をやっているが、中学生や高校生、大学生にヒアリングやグループディスカッションをしている。色々な仕事がなく、所得が低いことが、若い人たちが東京に出ていってしまう原因になっている。山形県は所得の向上を強く打ち出していないところがあるが、山梨県は新しい人たちだけが所得が上がるのではなく、今住んでいる人たちを含めて向上させるビジョンであってほしい。雇用の拡大も、量的な拡大でなく、テストベッドを活かして色々な職種、ベンチャーが入ってくるような展開とし、多様さがある山梨にしてもらいたい。

委員

資料1は非常に良くまとまっている。気になるのが、観光の話がクローズアップされていないところ。そこは強みであり、p2にもあるが豊かな自然環境に囲まれながら、というところを、ゲートウェイ、入口として考えるのであれば、そこに入ってくる人たちをどう取り込むかが見えてこないといけない。県内の中の人たちの活用についても、弱いのではないかな。

また、県内企業がテストベッドを支える力が本当にあるかどうかということが気になっている。墨田の話のように、様々な人が集まることによって一つのものづくりができることを示されているところを見ると、テストベッド分野を挙げている以上は、県内企業である程度支援できることを見せられないと難しい。観光資源、ワイン、FC（燃料電池）、宝飾なども含めて、強み、山梨のコアの話のテストベッドに活かすことが大事だ。

モビリティやロボットがあるが、2027年には「ポスト〇〇」となるので、今現在も色々なところで実証実験等がされている。その課題をクリアした上で、サステナブルなことを取り入れて、この地域に根ざしたものとしていく。テストベッドだけではなく、何か実装していくような形のものにできる所が重要だ。

政府の取り組みとしては、SDGsの話があり、それに絡めて持続可能な開発目標がこの辺りで立てられると良いのではないかな。ここに書かれている陸上養殖は魅力があるので、これらを絡めたアピールはもっとうまくできるのではないかな。

前回の議論で、山梨のマイナス点としてクローズアップされていた、拠点の部分。拠点に観光資源があっても、情報があまり行き届いてないというところがあった。モビリティで直結しますよと言われても、情報がないと行かれないという話であれば、MaaSといった情報を上手く活用するという取り組みを早く取り入れ、リニアが来る前に整備を行い、観光、テストベッドの情報を含めて情報網で見渡せる環境を早くつくった方が良い。

クリーンエネルギーはモビリティを組み合わせ、リニアと他駅を結ぶバスをせっかく作るので、FC（燃料電池）バス+自動運転は当たり前で、燃料はここからの供給ですよと見せても良い。グリーンスローモビリティ、20km以下のラストマイルをFC化する話もあるので、その取り組みをもって、最先端の取り組み、環境にも配慮した取り組みとして外に見せたらどうか。

コンベンション誘致の話も、その中身、使われ方による。コンベンションすることが目的でなく、コンベンションに来た人が観光でもここは良いよね、と外に発信し、外に広がっていく要素を入れられると良い。

委員

非常に良く出来ている。気になるのが、p2の山梨が目指す姿のところである。「やまなしライフの浸透」とあるが、これがどういうものを上手く打ち出せると良い。多彩な人材を惹きつける県としての、山梨ライフとはどういうものなのか。そこでテストベッドができる、こういう実験・実装に魅力を感じる人が集まってくる街づくりが、リニア開業までに出来ていくと良い。

若い人は車離れし、歩いて暮らせる生活を好む。そういう意味では、今の状況で人を惹きつけるのは難しい。比較的高齢者の話が多いが、そうではなく、若い人たちも車に頼らず暮らせる。すべて街の中に埋め込むことができる話かと思うので、テストベッドと街づくりを一体化して進めていく。

「やまなしライフ」は、先進的なものと自然なものが混じっているものであり、それを好む人を惹きつけ、対流の場を作ることもまちの中で考えた方がよい。街自体が上質な交流空間となり、色々な人が集まってきて、うまく創発的な話ができるのが望ましい。テストベッドも含め、もう少し一体化した街づくりの中にうまく埋め込む話となればよい。

委員

自動運転では、カリフォルニア州では、シリコンバレー周辺では自動運転でいいと特別許可を出している。フロリダでは、知事が州内で無人でもOKとするアナウンスをしている。今年11月、フランスでは自動車交通全般を対象とする交通法を制定したが、その中では、「2040年には化石燃料の車は販売しない、シェアリングの普及、自動運転、マイクロモビリティで国民の足を確保する」、とした。

一方で、マクロン大統領は、電池産業はアジアから持ってかえるとしている。フランスは、ナビヤとイージャーマイルの2社（2社ともに、フランスのベンチャー企業）がある。

一方、トヨタがイーパレットを同じような仕様で出しているが、日本は規制が厳しく、苦戦している。

例えば、トヨタのイーパレットの自動運転のテストベッドを山梨で整備すればとてもインパクトがある。日本でも、「カリフォルニア、フロリダに次いで山梨で」、という風にするとよい。リニア駅と身延線間のシャトルバスを自動運転で実証実験すると、少し興味を持ち始めるのではないかと。非常に壁は高いのだが、みんなが何とかしようと思っているテーマなので、自動運転のテストベッドを山梨でやってほしい。電気自動車の時代に先駆けて、本気でやればとてつもないインパクトとなる。政治的戦略も含めて面白いのではないかと。

(2) 災害に強いリニアを活かした防災力の強化について

[資料2について事務局より説明]

議長（知事）

今の説明を踏まえ、南海トラフ等の災害時のバックアップ拠点として本県がどのような役割を果たせる可能性があるか、意見を賜りたい。

委員

災害時のバックアップ拠点構想は各地にある。関西広域連合では兵庫県が防災分野のリーダーで、奈良県が副リーダーをしている。兵庫県の発想としては、防災庁構想を打ち出しているが、今のままでは対応できない状況だ。「政府に防災庁、防災省を作り、拠点を東京だけでなく、関西にも置く、ブランチとして東北にも置く、という体制で、互いにカバーする」ということを提言し、全国知事会でも流れが出来てきている。だが実際は、政府としては、新しい役所を作るのは難しく、現在やっていることをさらに連携を取ってやっていくというのが基本スタンスである。今後、国民的な議論をしていくのが大事である。

今年の10月から、「国難災害対応マネジメント研究会」を立ち上げて、防災に関する研究者、国や自治体で防災に取り組んでいる人などがメンバーになって、自由に意見交換をする勉強会を始めた。私と防災科学技術研究所の林理事長が中心となって議論をしている。大規模災害時には、被災地における対応ももちろんあるが、広域的にバックアップする拠点が必要ではないかという議論もしている。山梨県、兵庫県からも参加していただいている。

資料にあるように、国難災害が起きたときに大事なものは政府の中核機能だ。国全体がコントロールできない状態にならないようにするためにはどうすればよいか。官邸は強く作ってあるが、それでも使えなくなることも考えておかないといけない。それがダメなら、内閣府、市ヶ谷の防衛省本部、立川の広域防災基地というふうに、そこまで本部機能の予備的な順序を考えている。ただ、それ以降は決まっていない。

有明地区に広域な防災拠点の一部整備が進んでいる。臨海部からバックアップしようとする構想である。内陸部からのバックアップという観点から、山梨には防災拠点の可能性があるのでないかと考えている。その際に、リニアが災害時にも活用できることが重要となる。地理的な関係、首都圏、中京圏との関係を考えると、場所的にも、リニアの活用の面からも、山梨にはバックアップ拠点の可能性があるのでないか。

ある意味では、全国の国民を守るためには、山梨自身が色々な災害に強い、安全な地域であることが前提である。山梨県という地域が、色々な災害に安全であることを確保することが必要だ。過去の災害、今後の災害見込みや被害想定、ハザードマップも出ているので、しっかりと対応できるようにするべきだ。どんな災害が来ても、想定外であったとは言えないので、安全な地域の整備を前提としてやっておくことが大事である。その上でリニアが開業することで、アクセスが飛躍的に向上する。リニアも地震や水害、火山噴火に強い交通インフラとして、整備をして頂きたい。それであれば、リニアを活かして、山梨が、わが国が抱える巨大災害のバックアップ拠点として取り組んでいく前提ができる。

国難災害の例として挙げられるのは、首都直下地震、南海トラフ巨大地震、大規模水害、富士山の噴火だ。その多くが、山梨に関連している。そういう中で、山梨自身が災害に強い地域とならないといけない。全国の人々にとっても、山梨にリニアができて良かったと思われるような防災拠点の整備が望まれる。政府から、施設を持って来てくるというだけではなく、県民を守る防災拠点としての位置づけも必要であり、それが広域防災拠点としてのバックアップ機能も持つという考え方につながる。新たに、核となる施設をいくつか作っていく必要があるかと思うが、それだけではなく既存の施設、民間施設も大いに活用していくこと

も考えながら、これから一緒に勉強していきたい。

委員

埼玉新都心が拠点例として書いてあるが、そこで3年間インフラを担当していた。新都心のエリアは、電力線の基幹網に直結する、また通信線の幹線を直結とすることにした。

甲府では、日本の通信の基幹網が中央道沿いなどの幹線道路に敷設されている。

災害時のBPSでは電力と通信が一番肝であり、阪神・淡路大震災のときは、電力が1週間、通信が2週間、復旧にかかった。バックボーンに直結している電話局が確保できればBCPは大丈夫であり、リニアも別系統の電力と聞いている。災害時には、電力網が途絶えても、リニアの電力線を分けてもらうようにするというのも、あるのではないか。

バックアップ・サーバーをクラウドに乗せるといっても所詮民間のサーバー。バックアップ・サーバーを甲府に置いておくと、日々のメンテナンスも含めて良いということもあるかもしれない。そこも指摘したらどうか。

(3) 新たなゲートウェイに必要となる機能について

[資料3-1、資料3-2について事務局より説明]

議長（知事）

新たなゲートウェイに必要となる機能は何か、意見を賜りたい。

委員

11月に現地を確認している。県の産業技術センターの東側に隣接したエリアは、もとより調整区域として、比較的広大な優良農地として既に活用されている。首都圏ではとても味わえない山梨ならではの、富士山を借景とした光景と併せてレベルの高い農産物の生産拠点として確保されている。

例えばこれらを活かして、さらに先を見据えたグリーンツーリズムやアグリビジネスなどといった農業6次元化の支援も可能なエリアとして考えられないか。自然環境の確保を含めた、多面的な機能を実現できるエリアだと考えられる。

これらを考える背景として、このエリアは、甲府市の従前公表のハザードマップでは浸水の実績がある地域として明示されており、周辺一帯が低地である。改正後の浸水想定区域として、3m以上、最大5mであるので、施設集約等を伴った活用エリアとしてはかなりハードルが高い。このハードルを越えて検討していくとの認識をして頂きたい。

公共交通インフラの活用として、甲府中心部へのアクセスや県内の広域的な動きに対応した視点で、今般、新駅と設定した地点から西に2.5kmほどのところに、基幹災害支援病院として指定されている山梨大学医学部付属病院があるが、例えばこのエリアは首都圏等の医療系の研究機関の誘致や、南海トラフ地震災害時の、静岡県域への内陸からの広域的支援対応の拠点機能としての検討が可能とする地区とも考える。また、この病院エリア西側の身延線までのエリア、小井川駅と常永駅の間エリアは、現状では大規模な農作地となっている。

これらの広域的な西側地区を防災拠点機能として兼ねた、民間資本としての誘導地や公共

事業用地等とする活用が図られるのではないかと。

新駅設置の部分のみならず、広域的な西側エリアをうまく使っていく。イオンタウンなどの商業施設も含め、都市機能を兼ね備えたエリアもあるので、このエリアを含めた、点と点をうまく結びながら駅周辺という幅の広い捉え方をしたらどうか。

この西側エリアは改正後のハザードマップでは、中央市と一部昭和町にかかる地区で、それぞれが最大0.5m以上3.0m未満という浸水想定区域であるが、改正前の従前公表においては、0.5m未満とされていた区域であり、これらの想定浸水等の影響には注視しながら、個別に地区を丁寧に検証することにより、より幅広い検討が可能な地域であると考えている。

リニア推進課長

ハザードマップでは、こちらの地区は3mから5mであり、また、元々田んぼで低いところは5m以上となっている。まずは、南部工業団地や真ん中の新山梨環状道路とレベルを合わせる造成を今後考えていきたい。また、リニアについては、駅部分はおよそ20mのところを走ること、駅に必要な中枢機能は中二階部分に集中させるとともに、駅の出入りも高いところを基本的に考えていきたい。

委員

ハザードマップも十分に踏まえて安全対策を取る必要がある。ゲートウェイとして、新たな駅ができれば、今後の色々な産業、観光、防災も含めて県内の拠点のさらに結節点として、駅及び駅周辺は大事な場所となってくる。

リニア駅前は山梨の顔であり、司令塔であり、全体に広がっていくタワーとしての機能も必要だ。そのためにも安全性が大事である。また、駅は高いので、水害にも大丈夫だと思うが、周辺の安全性も大事だ。さらに、いろいろなところへのアクセスも重要だ。リニア駅に、しっかりと災害時にもアクセスできる工夫をしていただきたい。リニア駅及び周辺の安全、アクセスの確保を図り、山梨の今後のビジョンに活かしていけるようなゲートウェイの整備を期待している。

委員

資料にある3つの必須となる機能は必要だ。しかし民間参入は、慎重に考えるべきだ。東京から山梨で下りて、駅でとどまって飲食する人はあまりいないのではないかと。逆に、山梨の人が早めに来てコーヒーを飲むことはあるかもしれないが、ニーズは限られている。

コンベンションも、かなり投資額が大きくなるので、慎重に考えるべきだ。

「道の駅」と一緒にすることはあり得るか。道の駅にはもともと駐車場、トイレがあり、物販施設もある。リニアの乗降客だけを対象にするのは難しいので、車の人たちもセットという考え方もある。リニア駅と道の駅をセットにしないとなかなか難しいのではないかと。

議長（知事）

基本的には、民間でやっていただくべきものは民間、公で作るものは、基盤的なもの以外は難しい。役所が商売をやってもうまくいかない。

ただ、色々な機能が集まる中で、有効なもので公共がやるべきものは何かということが、1つ論点となる。ご意見を頂きたい。

委員

あまり、建物などハードに注目しない方がいい。機能に着目すべきだ。利用者がいるのだから、段階的にやってもいい。

ニーズ発想で、ハードをこしらえた方が新しい街づくりという意味では面白いかもしれないが、ハードが最初になくはならないのではなく、本当に必要なものは必要だが、公共の部分も民間にやってもらってもいい。委託でも、管理委託でも新しいアイデアを是非行政で入れて頂きたい。

委員

機能について、ゲートウェイになるので、そこからハブにして山梨県内全域に散らばることが想定される。27年であれば、XR（VR（仮想現実）、MR（複合現実）、AR（拡張現実））が当たり前な世界となっている。コンベンション、スタジアムやMICEも、そのころには5Gを使って現実でMRをかけられる。

準天頂衛星「みちびき」の活用について、自動走行に意見が振れがちだが、エンターテイメント要素で面白いことができる。スマホをかざすとコンテンツが浮いてしまい少しずれるが、それを「みちびき」でやると、コンテンツを地面にぴったりと貼りつけることができる。超リアルになる。そのときに、サイバー空間からコンテンツを落とさなくてはならないが、これは5Gでできる。

新しい、e-スポーツなどは、「みちびき」と5Gで同時に投影をかけられる。あっちにいったらこれがあるよ、というのをMRで再現できるのが出来ているはずだ。そうなると、観光のインフォメーションのやり方が根本的に変わる。そのテクノロジーについては、大分見えてくる。

結局機能が大事だ。どう観光客を誘導するか、体験させるかとなる。体験型がだいぶ変わる。網膜投写など、27年頃にはできているであろうテクノロジーをどう使っていくか。ある程度面白く、ユニークでないといけないし、そこからさらに知ってもらわなくてはならない。そこはスタートアップが得意な分野だ。

当然ながら、街全体は多言語翻訳が自動でかかっており、米国では、人工知能といえば、ほとんどが自然言語の開発である。例えば、一斉同報での災害アナウンスでは、AIを活用すれば多言語同時で可能となる。防災無線も既にスマホでできる。UI（ユーザー・インターフェイス）やUX（ユーザーエクスペリエンス）というが、人間がどうより体感できるかを、山梨に来れば自然にできるというのはいいコンセプトになる。

クリーンエネルギーもそうだが、クリーンとは自然のままに、どうやってテクノロジーを感じずに幸せになるか、健康になるかということかと思うが、それを山梨は維持できる、というのはよい見せ方だと思う。

UI/UX的な思想が、街づくりにあまりない。webではあるが、それを街づくりに落とした

時の UI/UX はどうか、というところは、スタートアップに考えてもらう。

今使えそうな制度のひとつとして、日本版 SBIR 制度（中小企業技術革新制度）がある。中企庁管轄の法律で、公共調達を一部中小企業に出すという法律だが、今、法改正で内閣府所管に変え、SBIR を研究開発型スタートアップやベンチャーにも公共調達を開放するというものである。一部の街を作っていくための調達を、アムステルダム、コペンハーゲン、サンフランシスコもやっているが、ベンチャーのサービスを調達する、新しいアイデアを取り込むという仕組みも入れながら、ゲートウェイ機能を開発していくというのものもある。

委員

ゲートウェイが中央道と直結している。リニアは1時間に1本程度であり、非常に交通量の多い中央道は、物流、観光バスも走っている。ゲートウェイであるのだが、ここから広がってだけでなく、中央道とうまく繋がって、日本全体の中でのひとつのハブのようなどころになれると考える。

委員

短期的には、開発インパクトは高速直結のスマートインターが先にくる。今は、農業振興地域（農振）できれいに耕地整理されている。後からくるリニアの開発インパクト、高速のインパクトをどう調整、誘導、抑制をしていくか。県庁で相当きちんとやらないと、来てほしくない人がきて、来てほしい人が来られなくなってしまう。

コンベンションは、直近、中近、県内全域の選択肢となる。東京から来る人は、10分単位、20分単位で行動し、駅直近には必ずしも留まらない。県内各地への集中分散をスムーズにする乗換を前提にやるようなことが大事である。

委員

大津町で決定したということで、リニアは超高速鉄道であるから、それをどう活かすのかという視点が大事である。

高速道路との結節をどれだけ真剣に考えるか。県内と長野、静岡にどう運んでいくかを考える、インターモーダル（複数の輸送手段の組み合わせ）のハブ、モーダルコネクト（複数交通機関の接続）をどう真剣に展開していくかが大事だ。

交通結節機能として、P&R をきちっと作ることが大事で、将来的には自動運転が展開されていくという意味では、後で土地利用も集約できるので、駐車場が小さくできたときにどうするかという視点で、その後の土地利用も考えるとよい。

議長（知事）

以上をもちまして、議事を終了します。

本年最後の会であるが、ありがとうございます。来年もよろしくお願いいたします。

4 閉会